
ミール・ストーン番外編

澄空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミール・ストーン番外編

【著者名】

N8164A

澄空

【あらすじ】

ミール・ストーン本編の番外編です。テューサンドィルの一昔前のお話。結構、本編と関係があるよつな。

(前書き)

ミール・ストーン本編の番外編です。
テューサとティルの、一昔前のお話。
結構、本編と関係があるような。
そんな感じになっちゃいました。
関係ある話が、第1~9部あたりで出てきます。
後々を楽しみにしながら読んで頂けると幸いです
本編の方も、是非読んでみてください。

テューサ篇

「ごめんね、テューサ。ママは行かなくちゃいけないの。あなたの為なの。分かつてね。あなたの代わりに・・・。

7歳の私は飛び起きた。

まだ外は真っ暗闇だった覚えがある。真っ暗で、広すぎる部屋に、大きすぎるベッド。何もかもが私には大きすぎて、寂しい思いをした覚えもある。

あの夢も、あの夜が初めてじゃなかった。何回も、何回も見たことがあった。その度に私は目を覚ましていた。同じところで目を覚ますもんだから、続きを見たことが無い。もしくは無いのかもしれない。あれは多分、幼い頃の、私の、封印された記憶なのかもしない・・・。

夢で、母は幼い私の頭を優しく撫でていた。私は、母の言つていることがちんぶんかんぶんで、きょとんとしている。そして、その後すぐに、私は暗闇に包まれ、それに脅え、目を覚ます。

あの頃の私は何に脅えていたのだろうか。暗闇？ 消える母の姿？ それともまた別の理由？ 分からないまま、ここまで時間が流れた。

そして、わかつた気がする。私が暗闇を嫌う理由。そういえば、何度もあの夢を見て、怖かった。胸の奥底に封印した。

今は、大丈夫。いつも、傍には仲間がいてくれている。シャネラに、ルビスに、ディル。そして、もうすぐもう1人増える・・・。ふと、怖くなるときもあるけれど、テュクもいるし。

でも、未だに疑問なのが、一つ……。母はどこへ行つたのだろう。そして、私の父は……？

「テューサ？ どうしたの？ どこか具合でも悪い？」

ぼんやりと、物思いに耽つていた私を気遣つて、ルビスが声をかけてくれた。その声にひかれて、シャネラと『ディールも私の方に注目する。

「どうした？」

「大丈夫ー？ どうしたの、テューサ」

3人の顔を順番に見て、私は笑つてみせた。

「なんでもないよ。みんな、大好き」

今は、みんなが傍にいてくれる。同じ運命を背負つた、仲間が。同じ道を歩んでいる、友達が。

ディール篇

「もう、大丈夫」

洞窟の中を歩いていたあたし。好奇心と、あたしを捜す城の兵士たちから逃げるためからだつたわ。歩いていると、先のほうに光が見えてきた。出口だ！ って思つて。お口さまに当たりたくつて、光の射す方へ走つた。そしたら、急にあたしの身体が宙に浮いたの！ びっくりしちやつて、ついつい大きな悲鳴が出ちゃつた。

「きやあっ……」

洞窟の中だったから、余計響いて。あたしの身体を捕まえていたのは、植物の蔓のようなもの。しっかりと縛られちゃつて、解こうにも無理。気持ち悪くて、ポルターガイストみたいで、恐怖もあつたけど、あたしつてばこんな時も好奇心が途切れなかつたの。「この先には何があるんだろう」みたいな感じ。

でも、どうにも出来なくて、ついには泣きそうになつちやつた。あたしとしたことが・・・！ そしたら、急に出口から差し込む光を遮られ、今一度視界が真っ暗になつたの。真っ暗になつてから何秒としないうちに、あたしの身体をきつく縛っていた蔓が解けたわ。ふわつてなつて、あまりにも急だつたから、地面にぶつかるときに受け身が取れないような状態だつた。痛みを予想して、目を瞑つた。でも、痛みは全然なくて、地面の固さも伝わつてこなかつた。そおつと目を開けてみると、知らない男の子に抱きかかえられていたの――！

この男の子が出口に立つたから真っ暗になつたのねつて、胸を撫で下ろしたのも束の間。そのまま男の子はあたしをお姫様抱っこをしたまま、出口から外へ連れ出したの。

久しぶりのたくさんのお兄さんの光が目に入つてきて、思わず目を細めちやつたわ。男の子はあたしを芝生の上へ座らせて、自分はその正面に座つた。

よく見てみると、男の子って言つても、あたしと同じくらいかもうちよつと年上の人だつた。背が高くて、ジエムよりもかっこよかつた。これが、第一印象。

「もう、大丈夫」

あたしがぼーっとしていると、彼は無表情であたしに話しかけてきた。だから、あたしも口を動かしたの。

「あなたは・・・だれ？」

すると、田の前の少年は、あたしに黄色の石を見せてきた。手のひらに乗つたそれを、よく見てみた。

「『平和』の、石・・・？」

ふいに、口から言葉が漏れたわ。でも、彼はあたしの言葉に頷いた。
『平和』の石のことは、よく知つてたわ。勉強を教えてくれる先生や、大臣から何度も聞かされたもの。「これは真実だ - - とか何とか言って。

「あたしと、同類の人・・・？」

あたしも、首から提げた『平和』の石を持ち、彼に見せるようにして問い合わせた。彼は、この言葉にも頷いた。なかなか喋らない人だな、ってこの時思つたわ。でも、友達になりたかった。

「あたし、デイルって言うの。あなた、名前は？」

「ミクヤ・グレイルー」

(後書き)

後々を楽しみにしながら読んで頂けると幸いです
本編の方も、是非読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8164a/>

ミール・ストーン番外編

2010年12月10日17時16分発行